

# エルンスト・トラーとドイツ革命

## 小野寺直樹

「昨日は私は発言しませんでした。私はドイツペンクラブの公式代表団に、私に対する釈明と出来るとすれば私の主張に反論するチャンスを与えてやろうと思ったのです。ところが彼らドイツ代表団は、当面している事がらの重大さにもかかわらず、もっともらしい理屈をつけて会議に出席しないということなので、私はやむをえず彼らの不在のまま発言することにしました。彼らには当会場のどこかで答えてもらいたいと思います。

私はいろいろな方面の人たちから、発言しないようにという忠告をうけました。なぜそうした方がいいのかということについて、ごもっとな意見もいろいろと伺いました。

作家は何をさしおいても作家精神にだけは従わねばなりません。人間生活を左右するものとして、暴力のほかに人間のモラルもあると信じて疑わないものは沈黙してはならないと思います。

私はまず、この会議に出席しているという幸運なめぐりあわせに感謝しなければなりません。あのドイツ国会議事堂放火事件の夜に私は逮捕されるところだったのですが、さいわいなことに私はそのときスイスにおりました。この自由というプレゼントを手になっている私は、当然の義務として、ドイツで捕われの身となっているすべての同志たちのことを考えないわけには参りません。〔……〕

5月10日に、下記のドイツの作家の著作が焚書にされました——Th. マン、H. マン、S. ツヴァイク、A. ツヴァイク、J. ヴァッサーマン、L. フォイヒトヴァンガー、K. トッホルスキー、〔……〕 B. ブレヒト、v. オシエツキー、〔……〕 F. ヴォルフ、A. ゼーガース、M. ブーバー、J. クチンスキー、E.M. レマルク、J. ロート、H. マルヒヴィツァ、A. デーブリーン、〔……〕 C. シュテルンハイム、G. カイザー、C. ツックマイヤー、〔……〕 E. トラー。

この焚書に対して、ドイツペンクラブはどんな態度をとったでしょうか。焚書はまだ分別のつかない若者どものやったことだ、と彼らは言いのがれをするのではないか

と思います。実はあのゲッベルス宣伝相がこの焚書の後見人なのです。あんな男とは比べようもないほど立派にドイツを代表する作家たちの作品を、彼は『精神的汚物』のレットルをはって燃してしまったのです。[……]

私たちは荒れ狂うナショナリズムの時代に、野蛮な人種憎悪の時代に生きております。芸術家たちは暴力によって隔離され、脅迫され、弾圧され、理性は軽べつされ、精神的営為はののしりの対象とされているのです。[……]

祖国ドイツに敵対する発言をしたとして、ドイツでは私のことを非難するかも知れません。しかしそれは当をえてはおりません。私の問題にしているのは、ドイツを統治する資格のない現在のドイツ政府首脳部のやり口なのです。ドイツでは多数の人たちが言いたいことも言えず、書きたいことも禁じられているのです。私のこの今日の発言は、それらの口を封じられている多数の人たちの代弁でもあるのです。[……]

冒頭からかなり長文の引用をしたが、これは1933年5月、ユーゴスラヴィアのドゥブローヴニクで開催された国際ペンクラブ大会におけるエルンスト・トラーの発言の一部である。この引用部分だけからでも、祖国ドイツをほぼ完全に掌中のものとしつつあったナチス・ファシズム体制に対する、トラーの激しい弾劾の姿勢がわれわれに伝わってくる。

ヒトラーが政権の座についたのは同じ年の1月30日であった。このときはまだ形式的にはナチ党独裁ではなかったけれども、実質的には独裁体制へのルールが敷かれたも同然であった。組織としての最大のナチスの敵対者であったドイツ共産党も、状況に対する自己判断の甘さもわざわざいって、ついに2月27日の国会議堂放火事件によって徹底的に弾圧されてしまう。そして3月5日の総選挙でナチスは実質的に過半数を制した。4月にはユダヤ人への弾圧がはじまり、非ドイツ的精神の完全な排斥をスローガンとしたあの焚書が5月10日に開始され、冒頭のトラーの発言にもあるとおり、トラーの著作もすべて灰燼に帰したのであった。

エルンスト・トラーは共産黨員ではなかったけれども、2月27日以後の反ナチス狩りでは射殺の対象とされていたということである。それが、たまたまスイスを講演旅行中であったため危難を逃れることができたのであるが、しかしその後彼はついにドイツの土をふむことなく、ニューヨークのホテルの一室で自殺して果てた。それはドイツを追われて6年目の1939年5月22日のことであった。45歳のときである。彼の上着のポケットにはロンドン行きの乗船券が入っていた。自殺直前の日付けの手紙をトラーから受けとった友人の亡命作家ヘルマン・ケステンによると、それには、「ニューヨークのペン大会のことが書かれてあり、トラーは2・3日中に、アルフレート・

デーブリーンと同じ船でロンドンへ行き、それからノルマンディーの私のところへきて、また一緒に脚本を書きたい、とあった。彼は計画を一杯持っていて、戦争が避け難く近くにせまっていることを絶望的に見とおしていた。戦争中はイギリスにいたいと思い、戦いがはじまるまえにフランスを去って一緒にイギリスへ行かないかと私にもすすめてくれた」というように書いてあったという。これによっても伺えるように、トラーの自殺の真因はいまだにはっきりしていない。

エルンスト・トラーはナチス党に対してその結党の当初からドイツにとって危険な存在であることを鋭く見抜いて、繰りかえし警鐘を鳴らしつづけた人々の一人であった。そればかりではなく、彼はナチスを育てる母体となったワイマル共和国の実体が、建前とはいかにかけはなれて、平和を求める民衆の期待を裏切るものであるかについても、いち早く具体的に的確に指摘した人でもあった。ちなみに、トラー（1893年生まれ）とヒトラー（1889年生まれ）とはほぼ同世代であり、同じく第1次大戦に志願兵として従軍したり、その後のドイツ革命期にはやはり同じように、ミュンヘンを舞台に各自の思想にもとづいて行動をおこなっていることなどは、この際あらためて記憶しておくべきであろう。

第1次大戦の末期、ロシアやハンガリーにつづいてドイツにおいても各地に、反戦そして平和を求めて民衆の蜂起が相ついでおこった。ドイツ革命である。キール軍港の水兵による反乱に端を発して、その後ハンブルク、ブレーメン、ケルン、フランクフルト・アム・マイン、ライプチヒ、ドレーズデン、ミュンヘンなどドイツの主要都市のほとんどがつぎつぎと労兵評議会の手に移り、1918年11月9日にはついに首都ベルリンで、皇帝旗に代えて赤旗が王宮にひるがえった。皇帝ヴィルヘルム2世は退位を余儀なくされ、オランダに逃亡した。しかし、これでドイツ革命が成功したのではなかった。この日、卓抜な革命指導者でドイツ共産党の創立者の一人であるカール・リープクネヒトは、王宮のバルコニーから社会主義共和国の樹立を宣言したのであったが、ドイツの状況としてはいまだそのような機運にあらずで、結果としては社会民主党によるブルジョア議会制共和国を引きだすにとどまった。それが、旧支配層をほとんどそのまま温存しての、ワイマル共和国の発足であった。

エルンスト・トラーはベルリンの革命さわぎをあとにしてミュンヘンにむかう。そこではすでにベルリン革命の前日の11月8日に、独立社会民主党のクルト・アイスナーを首相とする革命的共和政権が誕生していた。アイスナーはトラーの最も尊敬する同志であり、ミュンヘン行きはアイスナーの招きによるものでもあった。このと

きのミュンヘン行きは、その後のトラーの生涯を決するものとなる。彼の自伝的作品「ドイツの青春」(Eine Jugend in Deutschland)に主として拠りながら、以下にミュンヘン評議会共和国前後のトラーの行動と思想を追ってみたいと思う。

ミュンヘンに到着早々、トラーはバイエルン労農兵評議会中央委員会の第2議長としてアイスナーの補佐役をつとめることになった。やがて12月16日から開催された全ドイツ労兵評議会大会に出席のためベルリンにむかう。この大会は、11月10日以来のドイツ臨時政府(社会民主党のエーベルト、シャイデマン、ランツベルクおよび独立社会民主党のバルト、ディットマン、ハーゼの6人の人民委員によって構成)に対して、労兵評議会体制を貫くか、それとも社会民主党の主張する議会制とするかの、ドイツ革命の命運を決する重大な課題をかかえていた。しかし結果は議会制賛成派が多数を占め、革命派は後退を余儀なくされる。国民議会選挙を翌1919年1月19日に施行することに大会は同意した。トラーは書いている、「12月中旬、評議会大会のためベルリンにむかう。ここで最終的にドイツ革命の政治的意味が示されるはずだった。なんという混乱、なんという無知、なんという権力への意志の欠如をそれは明らかにしたことか。ドイツ評議会大会は、革命のおもいがけぬ贈り物である権力を自発的に放棄する。[……]共和国は自らに死刑を宣告したのだ。革命の先駆者カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの演説を評議会大会は聴くことを拒否する。」

12月30日から1919年1月1日にかけてドイツ共産党の創立大会が開かれる。そしてその直後にはじめざるをえなかったいわゆる1月斗争は、態勢の充分にととのわないままでのことだったので、革命派にとっては決定的な敗北となり、しかもその中心的指導者リープクネヒトとルクセンブルクの2人とも、1月15日に反革命軍の手によって暗殺されてしまった。1月19日の国民議会総選挙は、こうした情勢のもとに予定どおりおこなわれ、その結果勝利をえたいいわゆるワイマル連合派(社会民主党、中央党、ドイツ民主党)による連立内閣が発足することになる。

エルンスト・トラーは2月初旬、クルト・アイスナーとともに第2次インターナショナルの大会(準備大会)に出席するためスイスのベルンに出かけた。1914年に一旦破産した第2次インターナショナルの再建にこの2人は期待したのであったが、その中身は彼らの意にそうものではなかった。

2月21日、バイエルン州議会にむかう途中のクルト・アイスナーがミュンヘンの路上で右翼によって暗殺される。トラーの記述によれば、さきのベルンでのアイスナーの演説がドイツの反動派の憎悪を引きおこし、この暗殺行為につながったらしい。

トラーはこのときまだスイスに滞在していて、ちょうどこの日帰国の車中にあって同志の悲報を耳にしたのであった。トラーは最も敬愛していたこの革命的政治家クルト・アイスナーについて、つぎのように述べている、「一つのことが彼（アイスナー）を他のすべての共和主義的閣僚から区別していた。行動への意志、死を覚悟した勇氣である。民衆は、日々の労働の中でのみ成熟していくこと、だが生活と行動との間に壁がおかれていない場合にのみ成熟していくということを彼は知っていた。そして死を恐れなかった。そのことを民衆は知っていた。だから彼に信頼を寄せたのだ。才能や天分をもつ人は多いが死に対する恐怖を自覚的に克服した者にのみ大衆はついていくのだ。」

アイスナーの暗殺はミュンヘンを混乱におとしいれた。激昂した労働者たちは労働兵評議会に結集し、無能で何ら対策をもてない州共和国議会に対して一種の二重権力状況を形づくる。ベルリンの中央の事態とは相反して、バイエルンではこうして評議会共和国への機運を増していった。しかし、それまでのドイツ革命の全国的な推移からみて、一人バイエルンのみが評議会共和国として独自の革命路線を堅持していきける情勢にないことも明らかだった。最後の情勢判断をめぐって、ミュンヘンのドイツ共産党と独立社会民主党その他が対立する。ドイツ革命に共通した革命派内部の足並みの乱れが、バイエルンでも露呈されたのであった。トラーには革命派のこのような内部抗争がなんとも許しがたく思われ、後年「獄中からの手紙」のなかでも一再ならずその無意味さをきびしく指弾している。

1919年4月7日、ついに時間切れの形でバイエルン評議会共和国が宣言された。評議会中央委員会議長に、25歳のエルンスト・トラーが指名される。しかし、間際にいたるまで内部結束のために奔走していて、共和国宣言文にも署名していなかったトラーにとって、その心境はまことに複雑であった。労働者大衆の革命への要望が押えきれなかった結果のむりな行動であっただけに、指導部の体制はちぐはぐだった。トラーには先行きの見とおしはつかなかった。「果して革命は勝ったのか。この評議会共和国は失われたドイツ革命を救うための絶望的な労働者大衆のむこうみずな奇襲である。それは何を作り出すのだろうか。どんなふうに終るのだろうか」とトラーは書き記しているのであるが、これがトラーの偽わらぬ本音であつたろう。ともあれ、少し前の3月に組閣されたばかりの、社会民主党のホフマンを首相とするバイエルン州議会による政府は、革命を逃れてバンベルクに移る。

危機は予想されたとおり、内外からたちまちにして現われた。革命政権が樹立して2日後の4月9日にはすでに共産党が独自の行動をおこし、評議会共和国の政権交替

を要求する。トラーは共産党の集会に乗りこんでねばり強く協調をうったえつづけるが、この内部斗争の間に外部の敵、つまりバンベルクに逃走したホフマン政府が着々と反革命勢力を結集しつつあった。「評議会共和国はもちこたえられない。指導者の無能力、共産党の抵抗、右翼社会主義者の離反、行政の解体、食糧不足の激化、兵士の混乱、これらの事情はすべて政府の倒壊をもたらし、組織されつつある反革命に力をあたえずにはいない」とトラーは述懐している。4月12日の反革命軍の攻撃はなんとかはね返したものの、もはや当初の評議会共和国はその指導能力を失ってしまっていた。代って共産党のオイゲン・レヴィネを議長とする新指導体制が誕生する。ただちに10日間のゼネストが指令され、反革命勢力と対峙するための力の結集がはかられた結果、評議会共和国の露命も多少はつながったものの大勢はもうすでに決まっていた。ホフマン政府はバイエルンの民衆に反革命のための武器をとるように呼びかけるとともに、ワイマル中央政府に強力な軍事援助を要請して、その大反攻はすでに時間の問題であった。

4月16日、トラーはダッハウの方に馬を進めていた。ミュンヘンの革命的な労働者および兵士とともに。彼らは中央の指令もなしに自発的に反革命軍と交戦していた。カールスフェルトのピアホールでトラーは軍司令官に推された。第1次大戦中は砲兵隊の下士官だったトラーにとって、司令官として指揮をとるのは初めての体験であった。能力に自信はもてないものの、今や一刻の猶予も許されなかった。敵の手におちているダッハウの手前に布陣する。トラーは革命のためといえども、流血の惨事は最小限にとどめねばならないと考える。赤軍も白軍も同じ同胞であり、かつては同じ戦友ですらあった人たちが、今度はおたがいに敵対して殺しあわねばならない現実

にトラーは心を痛めた。そこで、ダッハウの反革命軍と無用な戦いを避けるべく交渉をする。まとまったかに見えた休戦協定もしかしついに実らず、ダッハウ攻撃をせざるをえなくなり、トラーも兵士とともに町に突入する。反革命軍の司令官は機関車で脱走、将校5人、兵36人を捕虜にしてダッハウを奪還した。「私は『ダッハウの勝者』だろうか。評議会共和国の労働者および兵士が勝利を斗い取ったのだ。党派の区別なしに彼らは革命を守るために斗った。社会民主党員も、無党派の労働者も、彼らに命令は不要だった。働くものの統一戦線が事実として形成された」とトラーは言い切っている。

4月下旬、ミュンヘンはずでに反革命の大軍によってどうにもならなくなっていた。評議会共和国の最期をめぐってまたもや革命派の内部斗争が激化する。妥協か軍事的決戦か、4月26日、共産党は決戦を主張して委員会から脱退する。新指導部が構

成されるがもはや統一はとれない。パンベルクのホフマン政権との交渉も、大勢を決したこの段階では通用しなかった。トラーは述べている、「彼ら（反革命軍の将校たち）はバイエルンを憎悪している。ここでの共和国は強力であったし、ここでのみ民衆が11月革命を守ったからだ。評議会共和国を転覆することによって、共和国そのものを攻撃しようと考えたのだ。」4月30日、パンベルク政権はミュンヘンの無条件降伏と指導者全員の引き渡しを要求する。町全体がいまやパニック状態であった。その夜、最後の工場評議会が開かれ、評議会は味方の武装放棄を訴える。ついにバイエルン評議会共和国はここに敗れ去り、その短かい歴史を閉じた。

明るく日、エルンスト・トラーはシュヴァービングに住む大学時代の女友だちの家に逃れて仮眠する。やがて眠りからさめて、今日は5月1日だったと彼はあらためて思う。しかし感慨に浸っているひまはなかった。トラーの逃亡がはじまった。トラー銃殺のニュースが流されて、トラーの老母を悲しませたりしたが、彼は生きていた。路上広告塔につぎのようなビラが貼り出される。

#### 賞金1万マルク 大逆罪犯人

共和国刑法第81条第2項にもとづき、ここに写真を掲載せる法律および哲学専攻の学生エルンスト・トラーに対し、逮捕状が発せられている。同人は1893年12月1日、ポーゼンのザモーチン、ブロンベルク行政区、コルマル教区、マルゴーニン裁判区において、商人夫妻マクス・トラーおよびイダ・トラー（旧姓コーン）の子として生まれる。

トラーはやせぎみの体格で、身長1,65～1,68メートル。顔はやせこけ、青白く、口ひげなし。目は大きく褐色、眼光するどく、考えこむときは目を閉じる。頭髮は色濃く、ほぼ黒色でウェーブしている。文章体のドイツ語を話す。

彼を逮捕するか、あるいは逮捕のための情報を提供したものには賞金

1万マルク

が与えられる。

適切有効な情報をミュンヘン検事局、警視庁、あるいはミュンヘン市軍司令部捜索隊のいずれかに寄せられたい。

真剣な搜索、逮捕のさいの電報、ならびにこの布告のできるかぎり広汎な伝達をお願いする。

国外において逮捕されたばあいには犯人を引き渡されるよう要請する。

ミュンヘン 1919年5月13日

ミュンヘン軍事法廷検事局

反革命の勝利のあと、革命を裁くために特設された25の軍事法廷は数千人を有罪とし、そのなかで共産党のオイゲン・レヴィネは死刑、エルンスト・トラーは5年の要塞禁固刑であった。トラーに対しては、大逆罪を犯したが、それは高潔な動機からであったとされた。トラーの被告としての最終陳述はつぎのごとくであった。

「私は、すべての行為を客観的な根拠にもとづいて冷静に行ったのであり、これらの行為の責任が私に帰せられることを要請いたします。

既存の状態を暴力によって変革することなど私にとってまったく問題となりえないと私が主張したとしたら、私は自分を革命家と呼ぶことはしないでしょう。われわれ革命家は、現状がその全体的条件からみて、もはや耐えがたいまでに硬直していることを洞察したばあいには革命を行う権利を認めるものです。そのばあいその状況を転覆する権利を持っているのです。

自分の考えにもとづいて軍事法廷に情状酌量を願い出ることを裁判官殿は私に要求しないでいただきたい。私はなぜ軍事法廷が設けられたかと自問します。地球上の搾取された労働者大衆の強力な革命運動をはばむために数人の指導者を銃殺したり、刑務所に送ったりするためにあるのでしょうか。そうだとすれば、それは本源的な大衆運動に対するなんという過小評価であり、われわれ指導者に対するなんたる過大評価であらうか！

革命は幾百万大衆の脈動する心臓に満された樽に似ております。この人々の心臓の鼓動がやむまで、革命的精神が死ぬことはありません。

人は革命について、労働者の賃上げ運動であるといい、それによって軽べつしようします。

裁判官殿！もしあなたが労働者のもとをおとずれるならば、なに故、なによりもまず物質的必要を充足させねばならないかわかりになるはずです。

しかし、この人々の胸のなかには、精神的解放、芸術と文化への深い渴望も生動しているのです。斗いはすでに始まっています。全世界の資本主義政府同盟の銃剣や軍事法廷によってこの斗いを圧殺することはできないでしょう。

あなたがたが最善の知識と良心にもとづいて判決を下されることを私は確信しております。しかしながら、私がこの判決を正義の判決としてではなく権力の判決として受けとるであらうということを、私は自分の見解にもとづいて、あなたがたに告白し



ないわけにはまいりません。」

エルンスト・トラーは判決どおり5年の刑に服した。1919年7月17日から1924年7月15日まで、最後の1日はバイエルン州からの追放のための時間にあてられた。黒髪の青年トラーは、30歳で出獄のときすでにその頭は灰色になっていた。しかし、この5年間の、他人には推しはかりえない苦難の期間が、トラーの生涯で劇作家としてはもとより、人間としても最も美しく花開いたときであった。人生とはまことに皮肉だといわざるをえない。この獄中時代以後のことや、詩人・劇作家としてのトラーについては、他日また稿をあらためて論じることにして、この小文では今少し人間トラーの姿を、「獄中からの手紙」(Briefe aus dem Gefängnis)をもとに覗いてみたい。

トラーは徹底したヒューマニストであった。彼ほど人間のもつ、もっているはずである良心あるいは善意を信じようとした革命家は稀有だったのではなからうか。そのことはまた裏返していえば、トラーが卓越した革命家には所詮なりえなかったことを示すことであろう。この点では例えば彼は、反革命軍とのダッハウ攻防戦のとき捕虜にした将校まで身柄を自由にし、人間として対等に扱ったりしている。それらの捕虜はしかしまた反革命軍の側に逃亡する。革命家としては実にバカ正直であり、落第であろう。しかしトラーは、浅薄な、センチメンタルなヒューマニストなどではなかった。彼はロシアの状況についてシュテファン・グロスマン宛てにつぎのように書いている、「あなたは書いておられる、『この世界で、じりじりとつぎつぎにレーニンに降伏してゆくほど恐るべき光景はない』と。いったい何が恐しいのですか。連合軍の封鎖、ロシアの民衆の完全な孤立化、国内での内戦の企て、飢えにあえぎ、死んでゆく幾百万の人々を救援する活動での国際連盟の失策。かかる外部からの圧力におされ、他方従来の社会統治技術の欠陥を認め、人間の本性を見誤っていたという自責による深い認識から、レーニンは一步後退を決意したのです。これが恐しいのですか。私はここにこそはっきりレーニンの人間的偉大さが示されていると思います。彼は、生きることとは無縁な、生活を敵視するようなセクト主義者とはちがって、理論を人間より上に据えたり、理論によって人間を破滅に追いこんだりしません。のみならずロシアの民衆の生きる可能性を確保することを第一義と考えたのです。」(1921年)

トラーはまた一再ならずあった彼自身への特赦の機会をすべて断って、判決どおりの刑に服したのであった。それはなぜだったのか。獄中の身で著名な劇作家となったトラーには獄外での釈放運動があつたと絶たなかったが、彼はそのつど運動の当時者に対して丁重な取り下げの手紙を書いている。出版者E・P・タール宛ての手紙から引

用しよう、「ドイツの精神的指導者の援助の下に私を釈放させようというあなたの計画を読んで感動を禁じませんでした。今日再び、心から、何とぞこの計画をおとりやめ願いたいと申しても、何らかの気まぐれから申しているなどはお思いにならないで下さい。私はしようと思えば2年前に出獄することもできたのです。当時アイヒシュテット監獄の検事が、戯曲『変転』の大成功をみたバイエルン政府が私の『特赦』を決定した、と知らせてくれました。『3週間すれば』と検事がいいました、『きみは自由の身だ』と。私はその場で特赦の計画をことわり、はっきりといいきりました。何ら害をおよぼすことのない同志や赤衛兵が監禁されているかぎり、私のみの釈放は断念すると。私の立場は、政治的情勢が変わったとしても、今日でも依然として変わってはいません。」(1922年)

革命的政治家としてのエルンスト・トラーはあまりにも理想主義的すぎたと一般に評されているが、しかし、真の民主政治の確立とその擁護への情熱は並みなみならぬものが彼にはあったし、ヒトラーも含めてのファシズムの台頭に対する鋭い政治的感覚なども、手紙の行間からよく汲みとることができる。ヴェルサイユ条約に関連してF・Pなる人物への手紙にはつぎのように述べている、「ドイツ政府は誠実さを示してフランスとイギリスの世論の支持をえるように努めるべきであった。しかるに彼らはつぎからつぎへと嘘をばらまくことによって彼らの信用を失墜し、イギリスとフランスのヴェルサイユ条約反対派がドイツの権利のために戦うことを困難にしているのだ。ドイツ政府の歴史的使命はミリタリズムの過去ときっぱり手を切って、国家の政治のなかに、そしてあらゆる文化組織のなかに平和の理念を公示すべきであった。さすれば道徳的な力を自らのものとしたであろうし、他のヨーロッパ諸国もドイツもこれを認めたことであろう。ところが過去の罪過のすべてをドイツの美德として弁護しようとする数えきれぬ抗議と運動からは、国内における国粋の陶醉をかき立てるだけで、共和国の敵の出現を促すことにもなるのだ。他日人は自ら呼び出した亡霊から再び自由になれぬことに驚くにちがいない。」(1921年)

トラーの監房につばめが巣をつくるようになる。以来つばめが彼の最良の友となった。1922年9月15日のテッサなる女性に宛てて、「窓を閉めれば幾分室のなかは温かくなるだろうが、つばめたちがまだそばで生きているので、扉のために彼らが巣にとじこめられるくらいなら、少しばかりふるえていたってかまわない。つばめだけがたった一つのなぐさめだ」と書くトラーのこまやかな心情は、そのまま美しい詩となって形象し、詩集「つばめの書」を生み出していることを付け加えておきたいと思う。

1920年代には最も著名な劇作家の一人であったエルンスト・トラーは、その後ナチスによって抹殺されて以来ほとんど忘れ去られたままになっている。第2次世界大戦後もそのような状況はさほど変わっていない。これはなぜだろうか。もちろん、このような運命をたどらされているドイツの作家はトラーだけではないが、1958年には東ドイツで、1961年には西ドイツからトラーの選集が出版されているが、全集は出版されていなかった。しかし、その全集もはじめて、ようやく本年中頃に、トラーゆかりのミュンヘンのハンザー書店から出版されたとのことである。ドイツでもこれは一つの小さくはない事件と言えるだろう。トラーの死後ほぼ40年目にして、エルンスト・トラーのトータルな評価がドイツの内外からなされることを心から期待しているのは筆者ばかりではあるまい。

〔引用文献〕

Hermann Kesten: Meine Freunde Die Poeten, Kindler Verlag, 1959 (引用は飯塚信雄訳「現代ドイツ作家論」, 理想社によった)

Ernst Toller, Prosa, Briefe, Dramen, Gedichte, mit einem Vorwort von Kurt Hiller, Rowohlt, 1961 (引用は学芸書林発行「全集・現代世界文学の発見」1所収の船戸満之訳「ドイツの青春」および東邦出版社発行の島谷逸夫・村山知義訳「獄中からの手紙・燕の書」によった)

冒頭のベンクラブにおける演説については下記による。

Literatur und Gesellschaft, Hrsg. v. Beate Pinkerneil, Dietrich Pinkerneil, Viktor Žmegač, Athenäum Fischer Taschenbuch Verlag, 1973

ほかに、平凡社発行の野村修編「ドイツ革命」(ドキュメント現代史2)を特に参照したことを付記する。

(おのでら なおき 本学助教授・ドイツ語)